國學院大學学術情報リポジトリ

文法とコミュニケーション：スル表現とナル表現、てあげる：特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 井上, 優, Inoue, Masaru
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000424

文法とコミュニケーション
—スル表現とナル表現，てあげる—

井上　優

1．はじめに

日本語学・日本語教育に関する概論書や一般向けの書籍には，日本語の現象に関する一般的な見方や説明が書かれていることが多い。筆者も日本語学関係の授業をおこなう際にはそのような説明を参考にしているが，その中には，別の見方も可能と思われるものが少なくない。授業ではそのような点についてできるだけ触れ，学生に「本に書かれていることは一つの見方にすぎず，自分でも考えてみることが重要である」ということを理解させるよう努めている。

本論では，そのようなトピックの中から，文法とコミュニケーションの関係に関わる次の二つのトピックをとりあげ，筆者の見方を述べる。

① スル表現（動作の表現）とナル表現（変化の表現）の使い分け

② 目上の人物に対する「てあげる」の使用

今回の特集テーマは「多様化する日本語研究の現在」であるが，本論では，上記の問題の考察を通じて，文法とコミュニケーションの関係についてバランスのとれた視点から考えることの重要性を示すことを意図している。

2．スル表現とナル表現の使い分け

まず，スル表現とナル表現の使い分けに関する次の説明について考える。

（1） 他者の不利益となる事態の発生に対して，何らかの形で自身の責任や関与を感じている場合は，スル表現を用いなければならない。ナル表現を用いると，事態の発生に対して責任や関与を感じていないことになる。

次の（2）～（4）の文章は，いずれも（1）について述べたものである。

（2） ①N子「あっ！」（先生の抹茶茶碗を洗っている時に，茶碗が落ちて割れてしまう）

②先生「どうしたの？」
③K子「あの，お茶碗が割れたんです」
④N子「いえ，私，先生のお茶碗を割ってしまいました。すみません。」
（略）

上の①の（　）内では茶碗の損壊が現象としてとらえられ，ナル表現が選ばれている。③のK子はN子が関与しており責任があることを知っているにもかかわらず，ナル表現を選んでいる。ここにはスル表現「割った」を選ぶと責任者がN子でその失態を指摘することを含意するので，それを避けるために選んだ可能性がある。この点でK子のN子に対する配慮表現（略）となっていると考えられる。これに対し，④のN子は茶碗を割ろうとして割ったわけではないが，関与者・責任者の立場からスル表現を選んでいる。このようにスル表現は意志や意図の有無によって選ばれるだけでなく，関与者・責任者の存在を明確にするためにも選ばれる。この場合N子がナル表現「割れる」を選ぶと，N子は茶碗の割れたことは自分には何の関係も，責任もないことを表現する。実際に無関係なら無実の主張の表現となるが，そうでなければ責任逃れの表現となりかねない。

（阪田・新屋・守屋2003:90-91，下線井上）

（3）　ハーバード大学の博士課程で文化人類学を専攻している一人の学生が，日本の社会を研究するために（略）長野県のある地域の民家に同居し，調査活動を続けていた。その家の大家さんはたいへん親切な人で，いろいろと面倒を見てくれていた。（略）ところがある日，突然こんなことを言い出した。

（略）実は，おととい大家さんの所へストーブを返しに行った，そのストーブは数週間前から借りて使っていたのだが，何かの加減で故障してしまった。それで，大家さんの所まで持って行った，そして壊れましたと言って，それを渡した途端，大家さんは不機嫌になり，それ以後一言も口をきいてくれない，なぜなのか自分には理解出来ない，というのである。私はその時，実際にどんなことばづかいをしたのかを確かめてみた。曖昧な記憶ではあったが，それでも再構成してみるとこのようであった。

「この前から借りていたストーブが壊れてしまいました。」

（略）私はそのストーブの故障の原因について尋ねてみた。そうするとその女子学生は，

「理由はよくわからないけれど，その朝，火をつけようとするとつかなくなっていたんです。だから壊れましたと言いました。」

と言うのである。（略）

（略）「壊しました」という表現は，文字通りに考えれば，確かに，壊れたことに対して自分が何らかの責任を持っている場合，あるいは，意図的にその行為を行った場合に限られるであろう。一方，「壊れました」は，物自体が壊れた状態を客観的に示すわけである。したがって，物が実際に壊れ，しかも壊れたことに対して当事者がとくに責任を感じないならば，「壊れました」と表現しても何ら差障りはないわけである。

しかし，（略）非常に日本的というか，いわゆる「大人である」ことばづかいをする人ならば，たとえ，故障の原因が不明で自分の責任の有無も不明であったとしても，恐らく「壊しました」という表現を選択するであろう。そのストーブは相手に属するものであるから，それを借り受けているという関係の中で，壊れたことに対する責任を自分は感じているんだということをとにかく表明するわけである。

（水谷2006:143-146，下線井上）

（4）　日本語では自分が誤ってコップを落とした場合，「（私が）コップを落としてしまいました」という。（略）これによって，自分の責任を自覚していることを表すのだ。

しかし中国語では，ついうっかりの場合，わざとではない場合には，「コップが落ちました」という表現になる。もちろん日本語で表現する場合も，この言語感覚は残っているから，中国人アルバイトのウェートレスがこのようにいったら，店主から「落ちたんじゃないでしょ！あなたが落としたんでしょ」と怒られてしまうかもしれない。

「落ちた」というと，日本人からすると，まるで他人事のように聞こえてしまう。中国人にしてみると「わざとじゃなかったのに，なぜそこまで怒られるのか……」となる。　（中島2013:162-163）

これらの文章はいずれも，「スル表現とナル表現の使い分けは日本語学習者にとって重要だが，その理解は難しい」という認識のもとで書かれている。そして，後述するように，「責任を感じている場合はスル表現を用いる」という説明は，日本語非母語話者に対するアドバイスとしては確かに有効な部分がある。

しかし，言語事実の記述としては，「スル表現を用いなければ『責任を感じている』という気持ちの文にならない」，「ナル表現を用いると『責任を感じていない』という気持ちの文になる」というのは言い過ぎである。実際，ナル表現を用いた（5）～（7）の発話は，意思に反して事態が発生したことを表す「てしまう」を用いているかぎりは，「責任を感じていない（他人事のように述べている）」という印象は特に受けない。文法的には，スル表現を用いた文の主語が何らかの意味での「事態の引き起こし手」であることは確かだが，スル表現の使用は「責任を感じている」という意味を表すための必要条件とまでは言えず，また，ナル表

現の使用も「責任を感じていない」という意味になるための十分条件とまでは言えない（条件の一部を構成するという程度にしか言えない）のである。

（5）（言いにくそうに）
申し訳ありません。先生のお茶碗を洗っている時に，茶碗が落ちて割れてしまいました。

（6）（言いにくそうに）
すみません。この前から借りていたストーブが壊れてしまいました。

（7）（言いにくそうに）
すみません。コップが落ちてしまいました。

「他者の不利益となる事態の発生に対して，何らかの形で自身の責任や関与を感じている」ことを表すためには，いくつかの方法がある。スル表現の使用もその一つであるが，それよりも重要なのは，①「すみません（ごめんなさい，申し訳ありません）」（以下「すみません」で代表させる）の一言を添える，②言いにくそうに（申し訳なさそうに）言う，という二つのことである。（3）の文章にあるような状況が生じたのも，「壊れてしまいました」というナル表現を用いたことが直接の原因というよりは，「すみません」の一言がなかった，あるいは，「言いにくそうに言っている」ようには聞こえなかったことが，直接の原因だったのではないかと推察される。

「言いにくそうに言う」ことは，「責任を感じている」ことを表すための必要条件に近いところがある。実際，「すみません。ストーブを壊してしまいました」という発話を「悪びれずに言っている」と受け取られる口調で言えば，「責任を感じていない」と受け取られるだろう。一方，「『すみません』と言う」ことは，「スル表現の使用」と同じく，「責任を感じている」ことを表すための必要条件とまでは言えない。実際，「すみません」と言わなくても，「あの…，ストーブを壊してしまいました」と言いにくそうに言えば，「責任を感じている」という気持ちは表される。文法とコミュニケーションの両方の観点から考えると，（2）～（4）の文章で問題にされている現象については，次の（8）のように説明するのがバランスがとれていると言える。

（8）他者の不利益となる事態の発生に対して，何らかの形で自身の責任や関与を感じている場合は，言いにくそうに言い，かつ，（ⅰ）「すみません」と一言添えるか，（ⅱ）スル表現を用いるかする。

ただし，（8）の説明が日本語学習者にとっても有益だとは必ずしも言えない。まず，どのような口調が「言いにくそうに言っている」ように聞こえるかは，言語によって異なる可能性があり，学習者によっては，日本語母語話者の耳に「言いにくそうに言っている」と聞こえる口調で話すのは難しいかもしれない。そのような学習者にとっては，「言いにくそうに言う」という説明は必ずしも親切な説明とは言えない。

「すみません」の使い方も，日本語非母語話者にとっては理解しにくい面がある。

（9）　日本人は簡単に謝る。例えばスーパーなどで人とちょっとぶつかる。すると日本人は我先に「あ，すみません」と口にする。いつだったか，日本に来たばかりの中国人が驚いていた。明らかに自分がよそ見をしていて人とぶつかったのに謝ったのは相手の日本人のほうだったという。　（相原2007:25-26）

（9）にあるように，日本語では，自分が巻き込まれた軽微な事態について，自分に直接の責任がなくても，「当事者として事態収束のために何かする立場にある」として，「すみません」と言うことがある。（3）のように「自分が知らない間に借りているストーブが故障した」という場合も，借りている間に生じた事態である以上は，当事者として事態収束のために「すみません」と言う。しかし，学習者の文化的・社会的背景によっては，自分に直接の責任がないのに「すみません」と言うことに違和感を覚えることもありうる。前述のように，スル表現を用いれば，「すみません」と言わなくても「責任を感じている」という気持ちは表されるのであるから，学習者によっては，「こういう場合は『すみません』と言う」という説明よりも，「こういう場合はスル表現を用いる」という説明のほうがわかりやすいかもしれない。

このように，現象に対するバランスのとれた説明が，そのまま日本語学習者に対する有益な説明になるとは限らない。しかし，後者はやはり前者をふまえて考える必要があり，一つの現象についていろいろな角度から検討することが基本であることに変わりはない。

一点補足すると，（4）には「中国語では，ついうっかりの場合，わざとではない場合には，『コップが落ちました』という表現になる」という記述があるが，これも少し言い過ぎである。中国語でも，「やるべきことをちゃんとやっておけば事態の発生は防ぎえたのではないか」という自責の念をもって言う場合は，他動詞文の一種である「処置構文」（前置詞“把”を用いて目的語を動詞の前に置く構文）を用いる（相原ほか2003:161-163）。

（10）　杯子　摔了。
　　コップ 落ちて壊れた
　　（コップが落ちて壊れた。）

（11）　“杯子　呢？”“我 摔了。”
　　コップ は　　私　落として壊した
　　（「コップはどこへいった？」「私がたたき割った。」）

（12）　“杯子　呢？”“我 把 它　摔了。”
　　コップ は　　私　を それ 落として壊した
　　（「コップはどこへいった？」「私がこわしてしまった。」）

（（11），（12）は相原ほか2003:162，ローマ字表記省略，逐語訳追加）

中国語の“摔shuāi”は自他同形であり，(10)のように自動詞としても，(11)，(12)のように他動詞としても使える。他動詞文(11)は意図的に割ったことを表す。一方，処置構文を用いた(12)は意図的に割った場合にも使えるが，「自分が誤ってコップを落として割ってしまった」という気持ちでも使える。中国語でも，自動詞文(10)は他人事のように言っていると受け取られる可能性がある。しかし，その一方で，(３)の「理由はよくわからないけれど，その朝，［借りていたストーブに］火をつけようとするとつかなくなっていた」のように，自分のミスが直接の原因になっておらず，自責の念も特にない状況では，中国語では，次のように自動詞文で言う。

(13)　这个 炉子　好像 坏了，怎么也　点不着。
　　この ストーブ ようだ 壊れた どうしても（火を）つけてもつかない
　　（このストーブ，壊れたみたいで，どうやっても火がつきません。）

自動詞文と他動詞文の使い分けに関する言語間のずれについては，慎重な検討が必要である。

３．目上の人物に対する「てあげる」の使用

次に，目上の人物に対する「てあげる」の使用に関する次の説明について考える。

(14)　相手に負担を感じさせる表現も大変失礼です。負担を掛けられたくないのは万人共通ですから，これは普遍的な言語運用上のルールです。ただし，何を負担と感じるかは文化によって異なりますが…。
　よく指摘されるのは，「（～して）あげる」という表現です。誤解している学習者が多いのですが，「（～して）あげる」は物や恩恵の供与を意味するからといって，常に相手を喜ばせる表現とは限りません。供与されるほうにとっては，利益を受けると，その分，負担に感じるために，むしろ恩着せがましい，失礼な表現になることもあるのです。プレゼントを渡すときに「先生にこれをあげます」とは言えませんし，相手のためにする行為も「～してあげる」を使わない表現にしなければなりません。　（新屋・姫野・守屋1999:47）

(15)　「～てやる・～てあげる」は話し手側の人の意志的行為によって第三者または聞き手が恩恵を受けることを表します。このため，話し手側の人の意志によって恩恵的状況が作り出されているという解釈がされ，恩着せがましい印象を与えます。これは「～さしあげる」を用いても同じです。
　（７）＃先生，駅まで送ってさしあげましょうか。
　このような場合，謙譲語を用います。

（8）　先生，駅までお送りしましょうか。

（白川監修・庵ほか2001:167）

これらの説明で述べられていることは，次のようなことである。

（16）　日本語では，「相手に恩恵を与える（相手のために動作をおこなう）」ことを明示的に述べることは，相手が負担を感じるような「恩恵のおしつけ」と受け取られる。

たとえば，目上の人物に対して荷物を持つことを申し出るときには，（17c）のように「お持ちします」と言うのが適切であり，（17a）のように「持ってあげる」と言うのは不適切である。また，その不適切さは，（17b）のように謙譲語「てさしあげる」を用いても払拭されるわけではない。（14），（15）の説明にもとづけば，（17c）は自分の動作の内容について述べているだけだが，「てあげる，てさしあげる」を用いた（17a），（17b）は，目上の人物に恩恵をおしつけることになるので不適切な発話になる，という説明になる。

（17）（目上の人物に）

a. ＃荷物を持ってあげます。

b. ？荷物を持ってさしあげます。

c.　荷物をお持ちします。

「相手に恩恵を与える（相手のために動作をおこなう）」ことを述べることが「相手に負担を感じさせる」ことにつながるというのは，日本語母語話者にとっては自然な説明である。割り勘に代表されるように，「日本人は貸し借りを好まない（借りがあると負担に感じる）」とはよく言われることだが，貸し借りなしの均衡状態に対する志向性が「相手に恩恵を与える（相手のために動作をおこなう）＝相手に負担を感じさせる」という感覚と結びついているのだと思われる。

しかし，母語話者にとって自然な説明が現象に対する自然な説明であるとは限らない。第一に，相手の利益になる動作を申し出ることは，それ自体，相手に恩恵を与えることを述べることである。それからすると，「てあげる」を用いない（17c）も目上の人物に対する発話として不適切であってもおかしくないが，実際にはそのようなことはない。第二に，「恩恵を与えられると負担に感じる」というのは，（17）のように動作の受け手が目上（動作主が目下）の場合だけでなく，次の（18）のように動作主と動作の受け手が対等の関係にある場合も同じはずだが，（18）の場合は「てあげる」の使用はまったく問題ない。

（18）（親しい友人に）

a.　荷物を持ってあげるよ。

b.　荷物を持つよ。

第三に，目上の人物にとって，目下の人物が自分のために何かしてくれることは，ある意味自然なことであり，現実にはそれほど負担に感じることはない。実際，目下の人物に「荷物をお持ちします」と言われたときは，「ありがとう」と

素直に応じるのが自然で，「いや，そんな申し訳ない」と言うのはかえって不自然である（言われた方が逆に困る）。しかし，対等の関係にある相手が荷物を持ってくれることは当然のことではなく，対等の人物に「荷物を持つよ」と言われて「いや，そんな，悪いよ」と言うのはごく自然である。その意味では，相手に恩恵を与える（相手のために動作をおこなう）ことが相手に負担を感じさせるというのは，むしろ相手が目上ではない場合にあてはまることだとも言える。

筆者の見るところでは，(16)の説明，すなわち，目上の人物に対して「てあげる」が使えないのは相手に負担を感じさせるからであるという説明は，文法的な説明というよりは，日本人のコミュニケーション様式の背後にある感覚にもとづく説明である。文法的には，目上の人物に対して「てあげる」が使えないのは，単純に「相手を目上の人物として扱っていないことになる」からと考えるほうが自然なように思う。(17)，(18)における「てあげる」の使用の適切さも，次の(19)，(20)における「いいよ／いいです」の使用の適切さとパラレルな関係にあると見られる。

(19)　（Aは集中講義のために来学した他大学の教授，Bは講義期間中その教授の補助をしている大学院生）
　　A：これ，ちょっとコピーしてきてもらえますか？
　　B：a. #いいですよ。
　　b.　わかりました。

(20)　（AとBは親しい友人）
　　A：國學院行きのバスの時間，調べてくれる？
　　B：a.　いいよ。
　　b.　わかった。

(19b)，(20b)の「わかりました／わかった」は，相手の指示や要望に自分から「従う」ことを表す。また，(19a)，(20a)の「いいですよ／いいよ」は，相手が自分に対して要請をおこなうことを「許す」ことを表す。「従う」という態度は，自分が相手よりも下の立場にあることを暗示するが，「許す」という態度は，逆に自分が相手より上の立場にある（相手は自分に「お願いしてよいか」と伺いを立てる立場にある）ことを暗示する。対等の人物に対しては，場面によって下の立場に立つことも上の立場に立つこともあってよいが，目上の人物に対しては，常に下の立場にいることが求められる。目上の人物に対して「いいですよ」と言うのが不適切なのも，目上の人物に対して「この件については自分が上の立場にある」ことを示すことになるからである。

(17)，(18)の「てあげる」についても，これと同じように考えることができる。(17c)の「お持ちします」，(18b)の「持つよ」は，相手の指示や要望，あるいは「こういうときはこうする」という規範に自分から「従う」という態度の発話である。これに対し，(17a)の「持ってあげます」，(18a)の「持ってあげる」は，「相手が

自分に負担をかけることを許す」という態度の発話である。それゆえ，「いいですよ」と同様，「てあげる」を目上の人物に対して用いることは，目上の人物に対して「この件については自分が上の立場にある」ことを示すことになり，語用論的に不適格になる。(17b)のように謙譲語「てさしあげる」を用いた場合も，「目上の人物が自分に負担をかけることを許す」という気持ちが含まれるため，語用論的な不適格さは完全には払拭されないことになる。

「いいですよ」と「てあげる」は，「相手が自分に負担をかけることを許す」という態度の発話である点では共通するが，「相手のために負担を許容する」という気持ちの度合いは，「いいです」よりも「てあげる」のほうが強い。実際，先生と学生が親しく会話ができる場合は，先生の要請に対して「いいですよ」と言うことはありうるが（例(21)），「てあげる」を用いるのはやはり不適切である（例(22)）。

(21)（先生と学生は親しく会話ができる関係）
　先生：これ，ちょっとコピーしてきてくれる？
　学生：いいですよ。

(22)（先生と学生は親しく会話ができる関係）
　先生：これ，ちょっとコピーしてきてくれる？
　学生：a.　はい，コピーしてきます。
　　b. ＃はい，コピーしてきてあげます。

「いいですよ」は「条件的には負担を許容してもよい」というだけだが，「てあげる」は相手に対して「実際に負担を許容する」ことを表す。その分，話し手の側の心理的負担が増し，相手が自分により大きな心理的負担をかけていることを暗示する。それゆえ，「いいですよ」と言えるような目上の人物であっても，「てあげる」とは言いにくいということが生ずる。「てあげる」の「恩恵のおしつけ」というニュアンスも，「相手に恩恵を与えることを相手に示す」ことから生ずるというよりは，「相手が自分にかける負担を許容することを相手に示す」ことから生ずると考えるのが自然である。

一般的な説明と本論での説明をもう一度比較しよう。

Ⅰ（一般的な説明）
　目上の人物に対して「てあげる」が使いにくいのは，「相手に恩恵を与える（相手のために動作をおこなう）」ことを示すことが，相手に負担を感じさせることにつながるからである。

Ⅱ（本論での説明）
　目上の人物に対して「てあげる」が使いにくいのは，「相手が自分に負担をかけることを許す」ことを示すことが，自分が相手より上の立場にあることを暗示するからである。

「許す」という行為は，自分のネガティブ・フェイス（他者に邪魔されたり，

立ち入られたくないという欲求：Brown and Levinson 1987）を侵害する行為を受け入れるということである。それゆえ，「相手が自分に負担をかけることを許す＝自分が相手より上の立場にあることを暗示する」というⅡの説明は，日本語非母語話者にも比較的理解しやすいと思われる。

一方，「相手に恩恵を与える（相手のために動作をおこなう）ことを示す＝相手に負担を感じさせる（相手のネガティブ・フェイスを侵害する）」というⅠの説明は，日本語非母語話者，たとえば中国語母語話者には必ずしも理解しやすいものではない可能性がある。

(23)　知り合いにおみやげを渡すとき，日本人は「つまらないものですが」と言うが，中国人はそのおみやげがいかに相手にとってよいものかを説明することがある。辞書の例文にも“**这**是特意**给**你**买**的”（これは（あなたの好みなどを十分に考慮して誠心誠意）あなたのために買ったものです）という例文がある（『小学館中日辞典第２版』の“特意”（わざわざ・特に）の項）。

友人の家を訪問したときも，日本人は「ちょっとそのへんで用事があったので，ついでに寄りました」のように言うことがあるが，中国人は“我是特意来看望你的”（私はわざわざ君に会いに来たのだ：講談社中日辞典第３版）のように言ったりする。　（井上2013:125-126）

(24)　プレゼントの金額を示すということは，相手に何かをしてあげることを悪びれないということだ。これだけあなたのためを思っていますよ，ということを堂々と表す。精力もお金も費やしましたと相手にいう。それでこそ真心が伝わると考える。誠意のストレートな表現である。（略）

私もよく中国人留学生からお土産をいただいた。夏休みに里帰りし，秋口に戻ってくる。秋の新学期が始まると帰省のお土産ですといって結構高価なものを持ってくる。

「北京中をさがしまわってわざわざ先生のために買ってきました」

「そりゃ高かったろう」と聞くと，素直に「はい」という。

（相原2007:188-189）

これらの文章で述べられていることは，中国語母語話者は「相手のために動作をおこなうということを示すことは，相手に負担を感じさせることにつながる」という感覚は日本語母語話者よりも希薄だということである。(14)の説明で「誤解している学習者が多い」と書かれているのも，「相手のためにという気持ちを示すことはよいことだ」という感覚が背景にある可能性がある。そのような文化的・社会的背景を持った日本語学習者に「相手に恩恵を与える（相手のために動作をおこなう）ことを示す＝相手に負担を感じさせる」という説明をしても，実感としては理解しにくいのではないかと思われる。

ただし，学習者の母語の「てあげる」相当表現に，日本語の「てあげる」に感じられるような「恩着せがましさ」や「相手が自分に負担をかけることを許す」というニュアンスが感じられない場合は，Ⅰの説明であれ，Ⅱの説明であれ，どのみち「てあげる」のニュアンスを実感として理解するのは難しい。むしろ，日本人は貸し借りを好まない（借りがあると負担に感じる）ということは日本人のコミュニケーション様式について述べる際に必ず言われることであるから，目上の人物に「てあげる」を使えないことについても，それと関連づけて理解させるほうがよい，という見方もありうる。その意味で，学習者の母語の「てあげる」相当表現のニュアンスを丁寧に分析することと，目上の人物に対して「てあげる」が使えないことを学習者にどのように説明するかを考えることとは，密接な関係にあると言える。

4．おわりに

本論では，（ⅰ）スル表現とナル表現の使い分け，（ⅱ）目上の人物に対する「てあげる」の使用という二つのトピックについて，概論書や一般向けの書籍に書かれている一般的な説明の再検討をおこなった。スル表現とナル表現の使い分けに関する一般的な説明は，「スル表現は人間の動作を表し，ナル表現はモノの変化を表す」という文法の観点が，また，目上の人物に対する「てあげる」の使用に関する一般的な説明は，「日本人は借りを負担に感じる」というコミュニケーションの観点が勝ちすぎている，というのが筆者の印象である。

概論書や一般向けの書籍の説明，および日本語教育における説明は，わかりやすさ（および教えやすさ）を重視した説明であり，そのために文法あるいはコミュニケーションのいずれか一方の観点が勝つことはあってよい。しかし，だからこそ，一般的な説明を出発点として「別の見方ができないか」を考えてみることは重要である。また，文法とコミュニケーションの関係についてバランスのとれた視点から考えるという視点は，その際に一定の意味を持つものと思われる。

引用文献

相原茂（2007）『「感謝」と「謝罪」―はじめて聞く日中“異文化”の話―』講談社
相原茂・木村英樹・杉村博文・中川正之（2003）『新版　中国語入門Ｑ＆Ａ101』大修館書店
井上優（2013）『相席で黙っていられるか―日中言語行動比較論―』岩波書店
阪田雪子（編著）・新屋映子・守屋三千代（著）（2003）『日本語運用文法―文法は表現する―』凡人社
白川博之（監修）・庵功雄・中西久実子・高梨信乃・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
新屋映子・姫野伴子・守屋三千代（1999）『日本語教科書の落とし穴』アルク
中島恵（2013）『中国人の誤解　日本人の誤解』日本経済新聞出版社

水谷修（2006）『話しことばと日本人—日本語の生態—』創拓社出版
Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press.（田中典子監訳2011『ポライトネス—言語使用におけるある普遍現象—』研究社）